
生活魔術士見習いカケル！

七夏 香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生活魔術士見習いカケル！

【Nコード】

N8562L

【作者名】

七夏 香

【あらすじ】

生活魔術。それは日常生活を楽しむ魔術。紋章魔術専門の魔術士見習いカケルは、師匠の遺志を継ぎ「生活魔術で日常生活を豊かにする」と決意。更なる知識を得るため故郷を出て、魔術学校がある王都への旅に出ることになる。攻撃魔術が使えない危険な旅。お供に友達の狼犬と、旅の途中で出会った寡黙で妙な剣士。剣と魔法の中世異世界ファンタジーです。

第1話：生活魔術士見習い、決意する（前書き）

初投稿作品です！

第1話：生活魔術士見習い、決意する

「明日には立ち退け、か。あのゴリゴリ魔術士め」

カサカサと乾いた葉ズレの音が響く人気の無い場所で、敬愛する師匠の墓前でカケルは独り言を吐き出した。

森の木々は緑色から落ち栗色に変わり始め、風は肌寒さを運ぶ。身震いひとつし、両手一杯に抱えた師匠の好きな秋の花を、パサパサと大木の根元に落とした。

家のそばの大きな榎の木を墓石代わりにして欲しいと師は願った。今は木の根元で眠っている。病気という病気にかからず、老衰で人生を閉じた。志は半ばだったが大往生だと微笑んでいた。

後のことを考え、師匠が所持していた貴重な品々はすでに隠し地下倉庫へ封印されている。あの傲慢で強欲な魔術士は隠さなかった品々で満足するだろう。

師匠と共に過ごした家を明日には出なければならない。「あのゴリゴリ魔術士」に家を追い出されたのだ。立ち退き期限は明日だった。

村の人たちの中には師匠に恩がある人が多い。身を寄せる家もあったかもしれないが、カケルは村を出ることにした。

村を出て、王都にある魔術学校で魔術を学ぶのだ。決意は固かった。残り準備をするためにカケルは家に入ってしまった。

が、すぐ出てきた。

腹がたってあの魔術士のことを考え続け時間がたつのも忘れていたが、お腹は空くものだった。カケルと師匠が住む家は、村の家々

が建つ場所より高い場所に建っていて遠かった。足首まである麻のスカートをうつとおしそうに持ち上げながら、ブチブチと呟きながら村へ下って歩いて行った。

「おうーい、モエギい。ご飯だよー！」

山道を下りながら、周りに広がる森を切り開いて造られたヤギの牧草地へ大声を出す。『ウオン』と応える鳴き声がして、追い立てられたヤギと一緒に少女より大きい狼犬が現れた。陽光に照らされた毛は深緑色で耳はピンと立っている。狼犬は昼寝をしていたヤギ飼いやヤギたちを追いやり、カケルの側にやって来た。尻尾を振りながらお座りし目をくりくりさせカケルを見上げる。

「モフモフーモエギいー。モフモフモエギいー！」

溜まった鬱憤^{つづかん}を晴らすように、グリグリとしばらく冬毛に頼ずりした後、気が済み歩き出す。モエギは心得た様子で真横について歩いた。カケルが4歳のとき師匠が子犬のモエギを連れてきた。それ以来一緒に育った友達で心強い護衛モエギは、放牧の手伝い以外はほとんど側にいる。師匠が亡くなった今唯一頼れる存在になった。

村の入り口から中央噴水広場と一番奥の村長宅を結ぶ石畳の道に沿って建つ家々を回って、昼ごはん^{ひるめし}と晩御飯を調達する。今日は何所も無料にしてくれた。山羊ムグの生肉はモエギに。燻製肉^{くんせい}はナイフで切り分けて黒パンと一緒によく噛んで飲み込む。大抵の食べ物^{もの}は噛み砕けると、微妙な気持ちで誇っていた。

カケルが住むミカーゴ村では本来は黒パンの原料である黒麦は育ちにくい^{むづかしい}が、カケルの師匠であるマルス・リングソーが土壌と黒麦の改良をし少量ではあるが実るようになった。この村ではパンの代わりは荒イモ^{あれ}を主食にする。村で育つ荒イモも師匠の改良の結果収穫量が増えた。生まれ育った故郷の味を噛み締めるのも最後になるかもしれないと、じっくり味わった。焼き荒イモにムグ山羊バター

添えは美味だが、正直黒パンは不味いと思いながら。

村の中央の噴水広場で腰掛けてご飯を食べていると、ふくよかな体を揺らして、白いエプロンに白い三角巾のチャミおばさんが、ランプを数個抱え持って小走りやって来た。

「チャミおばさん、こんにちば。今昼間ですよ？　ランプ持って何しているんですか」

「カケルちゃんに修理をしてもらいたかったの。村を出るって聞いたから。忙しかしら……？」

全部師匠が紋章を刻んだランプだった。このランプ全て獣油が要らない。刻んだ紋章が磨耗まもうしない限り魔法の灯りを灯し続ける。村にあるランプの多くが刻紋灯こくもんランプだ。ランプに手を伸ばし、誇らしい心地になった。「あのゴリゴリ魔術士」へのムカムカも晴れた。

「身支度は全部終わりましたんで承ります。彫り直すだけですから今日中に終わります。明日出発前にドアの横に置いておきますよ」
ニカと笑いランプを預かる。

マルス・リングソーは「紋章魔術もんしょうまじゅつの権威」と称されていた。その唯一の直弟子で養女がカケルだった。

紋章魔術は紋章を用いて魔術を発動させる。紋章魔術には刻紋魔術ひょうもんまじゅつと描紋魔術がある。

刻紋魔術は物品に刻んだ紋章を、魔力を込めることによって効果が得られて、何度も使えるのが特徴。

一方の描紋魔術は魔力が籠った特殊染料で紋章を描く魔術で、刻紋魔術に比べ使い捨てだが、魔力の無い者でも効果が得られる。

マルスは紋章魔術で不便な寒村の暮らしを、少しでも楽で豊かにしようとした。希望を込めて「生活魔術」と呼んだ。亡き師匠の意志を継ぐに足りないのは更なる魔術の知識、経験。王都にたどり着けば叶う。努力と執念は誰にも負けないつもりだ。

「本当に有り難うねえ……」

チャミおばさんは目尻に涙を浮かべ、カケルをそっと抱きしめた。静かに座っていたモエギの頭も撫でて手を振り帰っていった。

チャミおばさんを見送ったカケルは肩に肉の入った小袋の紐をかけ、ランプの持ち手を腕に通して案山子のように複数のランプのガラスが擦れないようにして家へ戻ろうとした。

「うあああああつー!!」

石つぶてが数個ランプ目掛けて飛んできた。モエギがサッとカケルの前に壁になってくれたので割れずに済んだ。低い体制で唸り声を向けた先に、ムカムカの原因が居た。

「何すんじゃワレえ!!」

銀系の縁取りの刺繍を施した長身の魔術士の黒いローブ。師匠と弟子共通で最悪の間柄。師匠が亡くなったその日に予め用意した手管で家を差し押さえたのは、師匠の残した遺産の品々を奪うためだ。血色の悪い目元と口端しをゆがめながら、村長の甥のゲルバーハ・フライシャは、土属性の石つぶて呪言魔術しんじゅを放ってご満悦の様子だった。

「こんな初級魔術も防げないクソ弟子様、ご機嫌いかがでございますかあゝ?」

ケタケタとそれは愉快と嬌声を上げた。

「預かりモノのランプが壊れるだろうがあああ!!」

抗議の言葉を無視し、また呪言魔術を発動させようとする様子にカケルは堪忍袋の尾が切れた。ポケットに入れておいたコイツ専用のとっておきの餞別を取り出した。最後の日くらい差し上げて構わないだろうと、出会ったとき使ってやろうと精製しておいた特性粉薬だった。

「モエギ!!」

モエギがゲルバーハに飛び掛る。紡ぐ言葉と体制を崩す。その瞬間を狙って、握った小袋の口を縛っていた紐を解き口をゲルバーハに向けて、袋に魔力を込めた。小袋の外側に染料で描かれていた紋様が輝いた。これぞ、紋章魔術の一つ描紋魔術の力が発動された証。直後、小袋からブフーッと、なんか茶色い粉がゲルバーハの顔に吹き付けられた。カケルは会心の笑みを浮かべた。

第1話：生活魔術士見習い、決意する（後書き）

誤字脱字が無いほうが珍しいくらいですので、誤字脱字指摘はもちろん、アドバイス、感想も待っています。

不確定な人に読んでもらうことも初なのでドキドキしている初心者ですが、ヨロシクお願いします！

あと1人でもいいからこの物語を読んで「楽しかった」と思ってくださることを願って……。

第2話：生活魔術士見習い、旅立つ（前書き）

バクバクと2話更新です。

第2話：生活魔術士見習い、旅立つ

日が暮れ夜の冷氣に包まれる。寒暖の差が身に堪えられない。カケルは作業の手を止めて、暖炉に手をかざした。

暖炉の中には薪まきが無い。代わりに刻紋こくもん済みの円形銅製の板が置かれている。フツと着合いを込めて魔力を送ると紋章が赤く輝いて熱を発した。床に伏せていたモエギが暖炉の側にやってきてクウと心地良さそうに鳴いた。

冬になればミカーゴ村は深い雪に閉ざされ外界への行き来はできない。師匠の刻紋こくもんランプがあれば長時間灯りが持つ。夜に作業をしやすい。村の人々も刻紋ランプの灯りの元、冬のための準備をしていることだろう。収穫した荒イモあら、黒麦、山羊ムグ、狩猟の獲物の加工。獣油の灯りを使っていた頃と比べ作業効率も上がったと、収穫物や加工品をお礼にくれたりもしたものだ。

修理の終わった刻紋ランプをテーブルに並べた、お茶を沸かすためヤカンに水を入れようとしたときドンドンと扉を叩く音がした。モエギがパツと飛び起き扉に向かった。

「こんばんはダヨ！」

声の主がすぐ分かったので、カケルは扉を開けた。夜だというのにランプも持っていない。変わりにパンパンになった袋を持っている。背はカケルより頭1つ分低い。褐色の肌にタコのできたゴツゴツした手、お下げ髪でぱっちりした大きな黒目をキラキラさせて訪ねてきたのは友達のルストウルソンだった。ルストウルソンはもつと山近くに住んでいるドワーフ族で、この種族は武器防具や物の加工が得意で力が強い。夜目が利くのでランプは必要ない。

「いよいよ明日ダヨネ、お土産もってきたんだヨ」

家の中に招きいれて椅子を進めてお茶を用意していると、ルストウルソンがお下げをフリフリ袋の中身をテーブルに出していた。大小様々な石の欠片でそれぞれ色合も違う。カケルが飛びついた。

「おおおお！ これは薬に使える。これは輝石の原石……でも大きな魔力染料インクの材料だからねー」

ルストウルソンはカケルが石に夢中になったので、代わりにお茶を入れた。師匠ともども交流があつて何度も訪ねているので勝手は分かつている。申し訳ないと頭をチョコンと下げるモエギに手を振つて、居間を見渡したときに気になったことを口にした。

「カケル。アンタあ、このバカでかいリュックもどき、旅には向かふんと思うんだヨ……」

カケルが背負うと、頭から腰下までの縦長で、厚みは30コム（カケルの肩幅より狭いくらい）もある。リュックの素材は布でも皮でもなく、金属っぽかったが、ルストウルソンには分からない素材だった。合成した金属だろう。見た目は背負える宝箱のように思えた。角は丸く加工されている。背負い紐は丈夫そうな皮だ。徒歩だと聞いていたので呆れた。このリュックモドキを背負って歩くことはできたとしても、危険がせまって逃げる時は致命的だ。

「何を言う。このリュックはすごいんだよ！！ 師匠の遺品の一つで、師匠が旅をしてた時にも使ってたんだって。沢山生活魔術が刻紋されてる世界に1つしかない、紋章魔術士にはヨダレものの装備だし……！」

ポンとリュックをはたいて、持ってみ？ と促されたので、ルストウルソンは背負ってみた。ビックリして固まり、呟いた。

「すごく軽い……んだヨ……！！」

カケルの説明によると、このリュックは複数の刻紋魔術が施されていて、中に入れる紋章魔術加工に必要な品々を保護する術、きつ

ちり詰め込んで重さを軽量化術で減らし、さらに、盗難防止術もかかっている。興味が沸いて詳しく聞きたかったが、カケルは生活魔術の説明に饒舌になって、明日の出発ができなくなりそうだと判断してやめた。

「だけでも。チコツと……寂しくなるんだヨ」

詰め込めない石はルストウルソンに返して、一緒にお茶を飲んだ。長い付き合いだから別れは辛かった。二度と会えない訳ではないだろうが、再開がいつになるかは分からなかった。それは王都までの旅が困難なことが確実だったからだ。村の外では害獣や追いはぎに会うかもしれない。次の村までの道は整備はされていない道が多く、デコボコしたりホコリっぽかったり、草や風や雨の侵食で埋もれているかもしれない。自然災害で歩けない土地もあるだろう。他の村や町でトラブルに巻き込まれるかもしれない。旅をする人は、戦える剣士と共に集団になって助け合いながら進むのが常識で、15歳の少女が1人で旅をすることは、自殺行為に等しかった。今さらその事をカケルに言っても、どうしようも無いのも事実だった。

「アタシは……もうなんも言わないんだヨ。モエギがいるしきつと、大丈夫なんだヨね……」

鼻声になったルストウルソンをカケルは黙って抱きしめた。ポンポンと背を叩いて放すとニカツと笑った。

「心配ご無用！ 攻撃魔術は習得してないし使えないのは事実。でもモエギは頼りになりまくるし、師匠には遠く及ばないけど、紋章魔術が使えるから創意工夫次第で何とかする！ 生活魔術士……見習いをなめんなって感じだよ！ お土産は、岩盤堀りできる生活魔術をプレゼントってどう？」

何とかする、そう言って何時も笑うのだ。そんな友人がルストウルソンは好きだった。

「それは良いネ。穴堀りができる道具は作ってもらったけど、岩

も掘れるようになったら、採掘が楽になるヨネ。楽しみダヨ！」

ルストウルソンは荒イモ作り名人でもある。お下げを揺らして笑った大切な友人ルストウルソンに、石と一緒に持ってきた荒イモを押し付けられつつ、きつとまた会いに行きたい。カケルは強く思った。

翌日早朝。夜陰が残る肌寒いが晴れ渡った空。白い息を吐き出しながら、荷物を背負い、預かったランプを持ってカケルはまだ薄暗い山道を下った。

チャミおばさんの家の扉の横に預かった刻紋灯ランプを全部置く。他の家からも頼まれた物が混じっているだろうが、チャミおばさんが渡してくれるだろう。

「明日でも昨日でもなくってー。今日が相応しかったんだ、この空があかしーだーかーらー」

鼻歌である。モエギもクウクーと鼻歌のような声で合わせている。家にあつた蔵書に、吟遊詩人の詩を編集した旅人の本があつて夢中で読んだ。その影響か独り言や鼻歌がたまに無意識に出てくる。

スキップ気味に村の出入り口の柵扉の前まで来ると数人村人がいた。見送りに来てくれたらしい。鼻歌を聴かれたとちょっと恥かしくなったが、流して挨拶する。チャミおばさんも居た。

「旅立つには良い天気だね」

村人たちの中から村長が挨拶した。村長は青年で目元がゲルバーハに似ているが性格は真逆。村長だった祖父から代替わりをしたばかりだ。村長が何か聞きたそうな視線を投げてるので、ゲルバーハを思い出しながら言った。

「大丈夫ですよ。数日痒い^{かゆ}だけ治りますから。ただ集中力散漫で呪^{じゅ}

言魔術なんてとても使えませんがね。原料は山荒^{あれ}イモの痒み成分。その濃厚なヤツです」

ああ。と村長は納得したように頷いた。カケルは思い出し笑いを飲み込んだ。魔術学校から帰ってきたゲルバーハとは親戚と一緒に住んでいる。痒い痒いと叫びながら身を擦^かじらせ、体中を搔^かいていて確かに気が散^ちっていきそうだった。不機嫌になると魔術ですぐ物を壊したり、村人にも術をかけようとするので、理由も分かつたし放置しようと思った。

「ゲルバーハが家を取り上げたこと、何もできなくてすみません。旅を無事を祈っています」

「見送り有り難うございます。お祖父さん、体調良くなるといいですね。薬、ちゃんと飲ませてくださいね」

前村長には世話になった。紋章魔術を扱^{つか}うために、魔力染料の素材である鉱物や植物の知識は欠かせない。師匠は薬を煎^{せん}じることにも長けていた。カケルも煎^{せん}じることが出来る。師匠が作った薬はストックが無くなった後のために、レシピを村長に預けてある。大丈夫だろう。

村長と握手を交わすと、チャミおばさんが抱きしめてきた。何度も別れの挨拶を重ね、村の人たちに見送られ村を後にした。

第2話：生活魔術士見習い、旅立つ（後書き）

30コム＝30センチ

読んでくださって有り難うございます

1話投稿後に感想を早速頂いて励みになりました。続き頑張ります！
投稿後にチェックしたら山のように誤字脱字削除部分を発見して冷や汗も……。

誤字脱字アドバイス感想、待っています

第3話・生活魔術士見習い、廃村に立ち寄る（前書き）

ウナウナとやつと3話UPです。

第3話：生活魔術士見習い、廃村に立ち寄る

ミカーゴ村周辺は、山と森と溪谷に囲まれている。山間の森の中を徒歩で2・3日ほどで森を抜けるはずだ。

木々の枝葉から色づいた枯葉がひらひら舞い落ちた。まだ青葉が残る時期なので、木の実が拾えないのが残念だった。堆肥した葉の道に落ちる木漏れ日が綺麗だった。道程で見つけた薬効のある植物に足を止めがちなカケルは、モエギに急き立てられてながら1日中歩いた。夜になる前に野宿できそうな場所を探して確保した。

「まだ森だから薪は確保できるし、1日目の夜の雰囲気味わいたいからに焚き火をしよう」

歩きながら拾っておいた小枝と、周囲の小枝と枯葉を集め、小枝と枯れ草を組んで焚き火の準備をする。

ポケットが沢山付いたコートを探って10コム程の金属の棒を出して、どっちが先端だったつけ？ と、呟きながら組んだ小枝の間の枯れ草に向けた。

ボツと金属の棒の片方の先端から種火が出て火をつけた。火打石の代わりの、種火を着けるだけの刻紋火種棒だ。

カケルはパチンと指を鳴らして、自分が作った生活魔術の品を、初めての旅で役に立てることが出来た喜びを噛み締めた。モエギは寝そべりながらチラッとカケルを見て目を閉じた。

カケルの住んでいたミカーゴ村は、村の畑を荒らすモグ（森で育つ猪のような動物。気性が荒い）や家畜を狙ってやって来る森狼の被害を防ぐために頑丈な柵で村を囲む。森を安全に進むためには害獣から身を守らなければいけない。

安全な寝床を確保するために、リュックから数本の細い鉤付き楔

と、赤い魔力染料で染めた糸を巻きつけたボビンを取り出した。焚き火を中心に、眠るスペースを含んだ大また歩き3歩分を半径にして地面に楔を打ちつけ、楔の鉤部分に糸をクルッと引っ掛け固定しながら円で囲った。

「これは警報術を施した糸でラインを作る道具ね。糸に生き物が振れると、音と光が出るんだよ。地面に線が引けない場所に丁度良いね！」

モエギが起きて興味深そうに見るので嬉々と説明してあげた。ただ効果を語りたかっただけでも言う。

ルストウルソンにもらった荒イモ^{アレ}で焼き芋を作って、村で貰った肉の残りを焼いて食べた。モエギには生肉のままで、荒イモは焼いたあと冷まして食べさせた。モエギは自分で食べ物を取って来れるが、初日夜のサービスだ。

森を抜ければ知らない土地。危機感より好奇心が勝ち、ドキドキとまだ見ぬ土地に思いをはせる。

リュックから古びた冊子を取り出す。魔術学園の教科書だ。「アリシューレ魔術学園入門書」と表紙にある。師匠の遺品整理をした時見つけた。裏に師匠の名前のサイン、中に魔術学校の所在地、内容は学園のこと。魔術の初歩的な説明が乗っている。師匠が書き込んだメモがあちこちにあり、熱心に勉強していた様子が分かる。

中でも紋章魔術のページの書きこみが多い。

「紋章魔術」のタイトル文字にグリグリと丸をした「重要！」の印を見つめて微笑んだ。師匠は魔術学校に入学してこの教科書を開いた時から紋章魔術に魅せられていたのかもしれない。

同じ学校で私も学ぶんだ。

そのために長く危険な旅を乗り越えて、たどりついてみせる。

「モエギ、交代で寝て見張りをしよう」

モエギに声をかけた時、微かに遠吼えが聞こえた。森狼の鳴き声だ。もしかしたら狩りの標的にされるかもしれない。冊子をしまい、太い枝で簡易松明を作った。気が張って寝付けそうにもないので、夜更けまで寝ずの番をすることにした。

朝になった。昨晩は森狼の気配が近くまで来たが襲ってはこなかった。焚き火とモエギのおかげのようだ。モエギをモフモフと抱きしめて感謝をし、荒イモを食べた。量があるので、しばらくは荒イモの食事が続く。次の村に着いたらパンを食べよう。

歩き続け3日。森を抜けたら、膝丈までの草しかない土地に出た。草原だった。ポツポツ申し訳程度にしか樹木は生えていない。地平線を見渡せる場所は初めて目にした。山と森の起伏の激しい土地しか見たことが無いカケルは暫く呆けたように眺めていた。

吹き抜ける風が草原を波立たせた。

サヤサヤと鳴る音が耳に残る。

道らしき跡に沿って、視界一杯の草原と空を眺めながら歩くのは気持ち良かった。

日が暮れる時、朝になる時、空は幾重の色を溶かす。木の陰が對比して栄える。

広い視界に、心が膨らむ。

何所にも行ける。

モエギは草原を走って先行しては戻るを繰り返した。危険な事が無いか確認しているのだろうが、思いきり走り回れるのが楽しそうでもあった。

「何か……、すごいね。描きとめたくなるけど我慢しよう」

荷物に入れた染料を固形にして収めたパレットと、スケッチブックを思い出したが、先は長い。次の村に辿り着くことを第一に歩き続けた。

歩き続けてさらに2日。草原が荒地になった。

乾いた土地はひび割れて、干からびた短い草がボソボソ生えている。木は枯葉を少し残しているだけだった。

むき出しになって、ゴロゴロと石がある歩きにくい道の先に複数の家を見つけた。

「村かな？」

モエギが先行して様子を見に行ったので、歩を止めて待った。暫く待つとモエギが戻ってきて、行こうと促すので安全なのだろうと判断してその村を目指した。

そろそろ屋根のある場所でゆっくり眠りたいし、保存食以外の食べ物を食べたい。お風呂も入りたい。期待して辿り着いた村は……。

人が居ない廃村だった。

屋根に穴が、漆喰^{しっくい}の壁はひび割れが、戸は外れかかったり無かったり。

村の周囲は荒れた畑の跡が見受けられた。防壁代わりの木柵は見る影もない。井戸を覗くと、つるべの残骸が入り込んだ枯葉と一緒に濁った水の中でプカプカ浮かんでいた。

ムウと唸^{うな}って、一番状態の良い家を覗き込んだ。泊るなら雨風をしのげる屋根と壁があったほうがいい。戸を開けて踏み込むとホコリと煤^{すす}と藁屑^{わら}が舞った。居間と寝室だけの簡素な家。農民の家らしい。

「まずは掃除からかなあ。このままじゃ寝られやしないよ……。アア、モエギは入っちゃダメ！ 灰まみれ姫になるからねっ！ 私は魔術士……見習いだけど、まだ変身させてあげれないし、城と王子も無理無理い……。っと、これが使えるかな」

モエギに待てと指示して、リュックを漁って紋章が刺繍してある雑巾を取り出した。高い場所から乾拭きをする。紋章が光り、擦った跡はホコリと煤がサッパリと拭き取られた。吸着術を施した雑巾で居間中を吹き掃除して、土むきだしの床をなんとか整えた。

これで眠れるだろう。腰をたたきながら満足気に見渡して、真っ黒になった雑巾の片面を眺めて、紋章が刺繍されている綺麗な面を外側に、茶巾包みして口を紐でグルグル縛り、リュックに入れた。

「警戒線どうしようかなあ。誰も居ないはずだけど、何が起こるか判らないし。家を取り囲むほどには、糸の長さが足りないし。壁があるから、通り口に粉を引いておくか」

何かあればモエギも起きるだろう。リュックから赤い粉の小瓶を出して戸の外に粉で線を引いた。森で使った赤い糸と同じ効果の粉

で、1回反応すると効果が消滅する。

掃除に時間をかけたために、陽が落ちた。リュックにぶら下げていた刻紋ランプを灯す。

煮炊きできる竈^{かまど}があるようだ。カケルは腰のベルトに付けていたウエストポーチを開けた。

手のひらサイズの円形の金属板^{カード}が何枚も入っている。それぞれ違った紋章が刻紋されている。術がこもった携帯できる生活魔術で、すぐに取り出せるようにしている。故郷の家の暖炉で煮炊きに使用した調理加熱術のカードを1枚抜き出して、竈に置き発動させ携帯小鍋でお茶を沸かした。小鍋は湯や調理の他、染料、薬草を煎じるのにも使う必需品だ。

「パンが食べたかったなあ……。次の村まではお預けじゃねえ」

銅のカップで食後の薬茶を飲みつつ疲れを癒す。ため息が出た。何所からか捕ってきたらしいネズミのような小動物を噛むモエギからそつと目をそらしつつ、窓の外を見つめる。

村の外に出て誰にも会っていない。この廃村は人為的に壊されていた様子があり、それが原因で人が居なくなっただろうか。

モエギがいるから独りではないが、思った事を聞いてくれ、頷いてくれる人が居たら……。

無知であるから、旅に出よう。
知り過ぎたから、旅に出よう。
変わらないから、旅に出よう。
変わりたいから、旅に出よう。

私の運命を、手引く他人に出会いたいから。
進み続けよう。

ピイイイイイイイイイ！

戸の隙間から激しい光が漏れ、甲高い音が鳴り響く。外側の戸口
地面に描いた警報術に引つかかった存在がいる。

モエギが身を低く構え警戒態勢を取り、カケルは顔を赤くした。

第3話：生活魔術士見習い、廃村に立ち寄る（後書き）

誤字脱字指摘アドバイス、お待ちしております

第4話：生活魔術士見習い、ファーストコンタクトする（前書き）

アタフタと4話更新。主人公の容姿がここでやっと分かります

第4話：生活魔術士見習い、ファーストコンタクトする

「うひよあああああ！！！」

「うわあああああ！！！」

戸を勢いよく開け放つ。同時にモエギが戸の外に向かって飛びかかった。

カケルは捧きれをひつつかみ、刻紋灯ランプを掲げ、モエギに押さえつけられた人物に近づいた。弓と矢筒を背負った弓使いらしき汚れたフード付きの外套を羽織った青年だった。

青年はかすれた呻き声を零す。

モエギは押さえつけただけで攻撃をしていない。眉を顰めて観察する。外套の肩部分に滲んだ血。顔には疲労の色が濃い。痛みこらえているようだった。

激しく動揺してしまったが、この人物がどういった目的で近づいて来たか確かめなければいけない事を思い出した。

「アンタ、誰？」

しゃがみこんで訪ねると、青年は静かにカケルを見つめた。

「ノエ村の……、セキだ。助けを求めにミカーゴ村へ……」

カケルは目を丸くした。近くに村があるのだろうか。故郷に助けを求める。どんな事情だろう。興味が沸いた。青年の装備を見るに、ミカーゴ村まで距離があるのにずいぶん荷物が少ない。旅人でもないようだ。

抵抗するそぶりが無いということは敵意は無いのかもしれない。肩の傷は深そうで、青年の言葉を信じるならば、この状態でここまで来たのはよほどの急を要するのだろう。

「念のために、武器は預からせてもらうかね」

「ごそごそと青年の弓と矢と、腰につけた短剣を没収する。青年は大人しかった。」

「モエギ退いてあげて。治療をするから。もし危害を加えようとしたら、ウチの護衛モエギがすぐ動くからね？」

モエギがカケルの側に戻った。警戒を解かずにジッと青年を見つめ続ける。青年は頷き、ふらつきながら肩を押さえ立ち上がった。力が入らなく座り込んだので肩を貸して家の中へ連れて行った。

「この傷は矢傷か……ちょっと深いね。顔色良くないのはろくに食べて休んでないからなの？ そんな状態でミカーゴ村までは無理だよ」

リュックから外傷用の薬と包帯を出して処置をした。傷から血がジクジクにじむのでウエストポーチから金属板カードを抜き出して傷部分に当てて魔力を送った。板が淡く発光した。

青年は驚き身をよじらせたが、魔力を送り続けていると表情を緩めた。まじまじとカケルを見つめる。カケルはニンマリ笑って、時間をかけて治療力活性術を刻紋こくもんしたカードで出血する傷口をふさいだ。

出血が止まり、痛みが和らいだ青年に滋養のある薬茶を飲ませた。自分の羽織っていたマントを被せて休ませると青年はすぐ眠った。事情を聞くのは明日にしよう。今日は良く働いたと自分を労った。緊張を重ね、魔力を送り続け疲労感と眠気を噛み殺しながら警戒線を描き直して、モエギに見張りを任せてカケルも眠った。

「助かりました。有り難うございます」

翌朝。深く頭を下げ、礼を言う青年セキは、改めてカケルを見つめた。

日除けのフェルト帽子、ポケットが沢山ついたゆったりとした丈夫で上質なコート、腰ベルトにはウエストポーチと短剣をぶら下げている。長ズボンに履きおろしたばかりであまりくたびれていない皮長靴。荷物を入れたリュックは大きすぎ素材が謎だが、旅人なのは間違いないだろう。むっつりと青年を見返す大きな瞳は柔らかい青。ふぞろいの黒い短髪は艶やかだ。

歳は13歳前後に見え小柄。一見頼りなさそうだが、昨晚魔術らしき術で治療してくれたり、今も火を使わずに湯を沸かしてみせた事から魔術士と判断する。側にいる珍しい色をした大きな狼犬は強そうで、良く馴れている。魔術士なら力を借りることができれば。セキは希望が沸いてきた。

「何……？ ジロジロ見られるほど変？」

自分の服を見なおして、カケルは落ち着かなくなってきた。今更気づいたがやっと出会った、初めての外の人だった。

外の人からジロジロ見られるほど突飛な格好だろうか？ どう思われているんだろう？

「あの……さあ、ここに来た理由とか話してくれる？」

気まずさを感じたので、話を切り替える。

「そうでした。私はここから南東にあるノエ村に住む、セキと言う者です。現在ノエ村は……、賊に占領されています」

「うわぁと、カケルは息を呑んだ。セキは陰しい表情で話を続ける。」

「私は村長に頼まれマルスという魔術士が隠居しているというミカゴ村へ助けを求め村を脱出しました。矢傷は賊の見張りに見つかった時射られました。なんとかこの廃村までやって来たら、人が居ないはずの家から灯りが。それで……」

そこまで聞いてカケルは手をかざして話を止めた。真顔でゴクリと唾を飲み込んで青年ににじり寄った。

「そんな手負いで、賊かもしれないのに危険を犯して近づいた理由って。もしかして……………」

「は…………？ ああ、変わりたいから旅に出たんですね。えっと旅立ちの気持ちが分かる良い詩でした…………ね？ ホツとしまして助けを求めてみよう」と

「やっぱり聞こえたんだ、聞いたんだああああー！！！」

誰も居ないと思っていたので、つい口に出して詠んでしまった詩をまさか聞かるとは。羞恥で顔を赤くして暫くゴロゴロとのたうち回った。

モエギが落ち着けと顔を舐めたので、落ち着きを取り戻した。

焼き芋の残りと干し肉、薬茶を渡して朝御飯にする。よほどお腹が空いていたらしく、夢中ではおぼるセキに自分の芋も渡した。

「で、残念なお知らせがあります。マルスは師匠ですが…………亡くなりました。この廃村からでは距離がありすぎ時間がかかります。森は害獣が居ますし完治していない身では行くのはお勧めしません。ミカーゴ村の人々は自衛するだけで手一杯です。助けは望めません」青年はやはりため息を付いた。そしてカケルを真剣な表情で見つめた。カケルは「ウウ」と後ずさりした。

「魔術士様お願いします。村を救う手助けを！ 私独りでは無理ですが、貴方が居てくれれば…………！」

村にいる人々を思い不安を押し殺して、セキの言葉はかすれた。

グツと奥歯を噛み締めた。

村に賊が居るといふ。賊と戦うというパターンはできれば避けない。けれど見捨てておけない。

紋章魔術は準備に時間がかかる。必要だと思つ術を込めた刻紋・描紋道具を用意したり、無ければ必要な魔術効果を得るために紋章を描く時間が必要だ。呪言魔術じゅごんのように、呪文を唱えれば即座に術を使える訳でもない。戦いに不向きだ。

カケルは紋章魔術専門で生活魔術が得意分野。さらに、炎の玉を打ち出したり、風の刃を出して攻撃したりする攻撃魔術は使えない。そういった戦力を求められているとしたら、期待してくれているらしいセキに申し訳なかった。

カケルはウエストポーチに手を触れた。
セキを生活魔術で助けることはできた。戦力にならない私に何ができる？

出来ないことは出来ない。無いものねだりをしてても仕方が無い。
出来る範囲で何とかする。精一杯。結果は後で付いてくるものだ。
この出会いは外の世界で初めての縁だ。断ち捨てたくない。セキは悪い人に見えない。今を一生懸命生きる人にこそ、生活魔術は必要であるはずだ。ならば。

「出来ることは少ないかもだけど。ノエ村に居る賊の事、もっと詳しく教えてもらえる？」

カケルは決意した。

第4話：生活魔術士見習い、ファーストコンタクトする（後書き）

誤字脱字フォーエバー……orz

投稿後の修正が激しいです。某所では「誤字脱字パッシブ」と言われるくらいです。修正更新多くてそのせいでシステムダウンさせたらどうしよう！

誤字脱字・指摘・アドバイス・感想お待ちしております

第5話：生活魔術士見習い、森に入る（前書き）

お待たせしましたー……モニユモニユ。

第5話：生活魔術士見習い、森に入る

「ごめん、私は攻撃魔術使えないから戦力にならないんだ……。でも、ドノバーグの町まで送ることはできるし」

セキは落胆した。やはり攻撃魔術を当てにされていたらしい。

魔術士といえば、火、水、風、土の4属性攻撃魔術を使い、派手に戦うイメージがあるのだろう。ミカーゴ村からは出たことはないカケルだが、蔵書の冒険物語でよく詠われるのは属性魔術で戦う呪言魔術士が多いことから一般のイメージが推測できる。

申し訳ないと繰り返すカケルに、セキはあからさまな落胆の態度を取ってしまったことに気づいて慌てて謝った。

「魔術士様に出会えたからこそ、ともに歩けるまで回復する事ができましたし、無駄足をせずに済みました。一番近いドノバーグの町へ伝達の鳥で救援の連絡をしたはずですが、届かなかった事は仕方ありません。今度は直に助けを求めればきっと、衛士を派遣してくれるはずです。町まで宜しくお願いします……！」

早速出発しようとするセキにカケルは小鍋を片手にウエストポーチから金属板^{カード}を出しつつ待ったと声をかける。

「今更だけど自己紹介。私はマルス・リングソーの弟子の魔術師見習いのカケル・リングソー。カケルって呼んで。こっちはモエギ。習得魔術は紋章魔術専門。生活魔術ならまかして!!」

「生活……魔術？」

立ち止まって振り返るセキを横目に、カケルは小鍋の上にカード

をかざして発動させた。カードの下に薄らと霧が出現する。ゆつくりと霧が集まり雫がボタンと落ちた。「空気が乾燥してるから少ないな……」とカケルがぼやきながら魔力をカードに送り続けると霧の塊から小雨が小鍋に振った。

「これが生活魔術。日常生活を楽に豊かにする魔術の総称ね。今使ってるのはカードに刻紋した脱水術。水袋の水を補給するために空中の湿気を集めて抽出してる。あまり集められないみたいだけど、今はしょうがないか」

水をじょうごで水袋に注ぎ、道具を仕舞う。部屋の隅に立てかけた弓と矢筒をセキに渡す。

「食料も自分の分しかないし。弓が使えるなら獲物を獲ってね」

「ではノエの森に入りましょう。狩猟で歩きなれていますし、賊から身を隠しながら近づいて、村の様子を確認できます」

「森かあ。地元ジモテイの民とモエギ居るし。了解ー」

一行は廃村を後にした。

セキは矢筒を背負い弓を手に先頭を。

カケルの横にモエギが尻尾を揺らし並ぶ。

廃村を振り返った。

空は風に流されてきた千切れ雲で溢れた。陽が届かない雲陰に、廃村と荒地が溶けて見えなくなっていた。

道を外れて進む。同じ荒地でも随分様変わりするものだ。背の低い野草が紫、黄、と一斉に咲き誇って涼しい風に揺れている。

その先に、森の影が海原に浮かぶ島のように現れた。ノエの森だ。

森としては小規模ながらも、村に恩恵をもたらしてくれる。狩猟の獲物、木の実、野草、木材。村で見込みのある者はノエの森に入る猟人となる。森で歩く術、獲物を狩る弓の腕、森の主を避ける知識を叩き込まれる。セキは故郷の森の事を弾むように話す。戻ってきたことで、少し安堵したようでもあった。

「森の主?!」

ノエの森の前で、カケルはギョっとした。思い切り不吉な用語だと思った。

「はい。ノエの森の動物の頂点に立つ魔物で、ジャイアント・レッズパイダー、通称赤主あかぬしと呼ばれています。巢は森を移動しますが、近づいて巢系に触れない限り大人しいですよ」

「セキは猟人だし、赤主を避ける方法とかもちろん……?」

「心得てるつもりです。しかし巢に掛かる猟人も全く居ない訳ではなく……数年前にも……」

「なんでそげな事、言つのー!!」

カケルは大声でセキの声を遮って睨んだ。これからその森に入るといふのに気力を削がれるのはごめんだ。セキはため息をついた。「脅してるように聞こえるかもしれませんが、心して欲しかったんです。森に入ったら、珍しい草が生えていてもどうか足を止めて私から離れないように。赤主の巢は地面に掘られた穴の上に作られますが、見つけにくい巢もありますから」

カケルに噛んで含めるように諭す。カケルは苦い表情で目を反らした。荒地を歩いている間にも、立ち止まり、ウロウロし薬効の有る草を摘んでいたのだ。

「喰われたくないし。分かったよ……」

森の植物に興味津々だったようだった。

ふてくされながらリュックを漁り、金属製の柄と頭部を組み立て

始めた。

「ハンマー？ 細くて脆もろそうで武器にはなりそうにも……」

怪訝けげんな顔で作業を見つめるセキに、念のためだよと答えながら伸縮式柄を伸ばして振った。パーツがしっかり固定されていることを確かめる。頭部の打ちつけ面に、ウエストポーチの金属板カイドを四方についた留め金でパチンとはめた。

「んじゃ行きますか。のんびりしてらんないし」

視界の通る村の周囲の草原を歩けば、見張りの賊に見つかってしまふ。ノエの森の中を進み、村の牧場近くまで行き様子を伺う。森は格好の隠れ蓑になるはずだ。

カケルたちは森へ踏み込んだ。

森の中は薄暗かった。

曇天の森の中は背の高い木々の葉が雲灯うんとうりを遮さへって、足元が見えにくく、進む方向を見失いそうだ。

カケルはフカフカした枯葉と小枝を踏みしめ、木々の根と慎重に越え、羊歯シダをかき分け遅れがちに進む。

モエギが身軽に何度も戻ってきては、カケルの様子を伺う。セキは常に周囲に警戒しながら先導する。赤主を避けつつ、夜になる前に森で安全に野営できる場所まで進まなければいけない。早足気味になったセキに、カケルは何も言わず付いて行った。

「とりあえず、此処こゝで野宿しましょうか」

巨木の側、比較的羊歯が生えていない開けた場所に着いた。カケルはドスッと腰を下ろしフーと長い息を吐いた。健脚だと思っていたが、プロの足には到底敵わない。水を得た魚だなあと、セ

キを見て思った。

「そいえば、森には水場ないの？」

無くて飲料水には困らないが、火照った脚を冷やしたい。顔も洗いたい。

セキは指し示しながら、

「泉が少し先にありますが、足場が悪いので独りで行かないくださいね？ 私は獲物を狩ってきます。ここで野営の準備を待っていてください」

念を押し、身軽に木々の間へ消えていった。

この時期の森には、冬に備えて猪（森で育つ猪のような動物。気性が荒く、たまに畑に被害が出たりする。森地域の村で狩猟対象になる動物。食肉になる）が活発になるらしい。久しぶりにまともな量の生肉を調理できそうだと期待が高まる。モエギに付いていてもらえば、確実に成果が上がるだろう。モエギに付いて行くよう促す。

「クウ？」

「うん。半分は心配してくれるのは分かってるよー。だあいじょーぶ、野営の準備しながら待ってるし」

興味のある事に、まっしぐらになるカケルを何度も連れ戻した経験のあるモエギは、行っておいでと手を振り野営の準備をするカケルを未練気味に眺め、セキを追って駆けて行った。モエギも久しぶりに大きな獲物の生肉を食べたのかもしれない。

羊歯の葉を刈って山盛りにし、槌を打ち付けた。装着した脱水術のカードが輝きジュワっと一気に乾燥した。火種捧で薪代わりの羊歯に火を点け、テキパキと警報術の糸を回りに。セキとモエギが帰るのを待ちながら一晩分の焚き火の燃料を作った。

「むう。暇だ」

準備がすっかり終わって、聞こえた夜の虫と鳥の声の回数を数えて待つのもすっかり飽きてしまった。そうになると、暇をつぶすために一番やりたいことは一つしかなかった。

「あー、確か近くなんだよね泉。様子見ならいいよね？」

泉がある方へ歩く。半分心配気のもエギ、独りで行かないでと念を押したセキの記憶は退屈にすっかり上書きされたようだった。

「水辺に珍しい薬草あるかもしんないしねー」

あまりこりていない様子でランプと槌を持って立ち上がった。

水の音を目指し、ランプの灯りを頼りに歩くとチャプチャプと音がした。

足場が悪いと聞いていたので、ソロソロ近づくとき水の匂いがし、視界が開ける。

そこは湧き水で潤った狭いが深そうなお泉だった。溢れた水が小さな沢を作って地面を削って伸びていた。

カケルは沢のほうへゆっくり慎重に回り込んだ。

「やっと洗える！……ん？」

水に手を伸ばしたとき、ザリッと足音を聞いた。顔を上げランプをかざすと夜の闇の中、ユラユラと揺れながら人型らしきそれは呻うめいてこちらに手を伸ばした。

「ひっ！」

体が強張りつつ、ソロソロ後ろ歩きで遠ざかるうとした。

熊なら目をそらさずにゆっくりと後退すると良いとは聞いたが、アレは熊じゃなさそうだから見逃してくれるのか分らない。

「ぞ……歩く死体……？」

「あ……」

「ぎいやあー！！」

低く間延びした声を聞いてカケルは絶叫し、ランプを投げつけて怒涛の勢いで退却した。

振り返らずに來た道をひた走る。灯りが無いので木に付けた目印も見えない。ザカザカと腐葉土を蹴って走る音が瞬く間に近づいた。後ろから灯りが射し、振り返る前に肩を捕まれて躓いた。がむしやらに振りかぶった槌はあっさり手で押さえられ恐怖で固まる。

「ガアアア！！」

カケルの後ろからモエギが飛びかかった。悲鳴と足音を追ってすぐ駆けつけてくれたようだ。強靱な前足で押さえられる前に、その人は飛びのいて避けた。

「……………あれ？」

座り込んだまま呟く。

「モエギ！」

シュツと空を切り矢が飛んで、避けた相手の後の木に突き刺さった。

「……………やっと会えた、のに」

ボソボソと低い声で話したのは、薄汚れた大男だった。

鎖帷子くさりかたびら鎧の上に無紋の藍チユニツク（袖無しくさりかたびらの膝下まである緩やかな上着）を着て腰のベルトでしめている。ボサボサの青みがかつた黒髪で眉間に皺しわを寄せ仏頂面で暗紫の目を細めてカケルを見つめている。

動けないカケルに手を差し出す。モエギが唸ると引っ込めて、逃

げる時に投げつけたランプをカケルの前にそつと置いた。

ガサガサと弓を構えたセキが息を整えながら歩いてきた。

「武器を捨てて、何の目的で近づいたか言え」

そうか、賊かもしれないんだ。

ぼんやりと見つめていると、大男はあつさりと腰に帯びていた剣を地面に置いた。ずっしりとして華美でない流麗な細工を施した鞘に収まったままの長剣だった。

「違う。殺すとか、そんな事は……しない」

「信用できませんね。その鎧も欺くためのダミーもしれませんし」

モエギは唸るのを止めた。隙なく大男を見つめている。カケルはモエギの態度の変化を見てフラリと立ち上がった。

「なんで追っかけてきたの？」

悲鳴を出しすぎ痛めた喉を押さえつつ尋ねると、大男は頭を下げた。

「迷って困っていた。一緒に連れて行ってくれないか？　これを預かって……村に」

懐を探る大男の動作に弓の弦をキリリと引き絞るセキに、カケルは待ったと手を上げた。

取り出したのは、羊皮紙で折られた鳥のような物。羽の部分に紋章が描かれている。カケルは男に近づいて羊皮紙を摘まんで凝視した。

「師匠の作った伝達鳥だ」

「それは、村長がドノバークの町に飛ばした魔法の品です！　なぜ貴方が持っているんですか？！」

「預かった。要請を受けた自衛団から。引き受けた……から」

どうやら詳しい話を聞く必要がありそうだと、やっと解れた緊張と体に深く息を吐いた。

「……まあ、あれだよ。詳しいことは野営地でね」

態度を軟化させたカケルに大男は屈みこんだ。

「怖がらせて、済まない……」

スツと大きくて硬い手が目じりをすくう。少し眉間の皺が薄くなっている。

覗きこんだ大男を見つめて　。

カケルは叫んで槌を横なぎスイングさせた。

第5話：生活魔術士見習い、森に入る（後書き）

剣士登場です。こっちもお待たせしました（笑）
誤字脱字指摘、感想、アドバイスお待ちしてます

第6話・生活魔術士見習い、なんとかする（前書き）

ブログと詰まりつつ、6話更新です……

第6話：生活魔術士見習い、なんとかする

「しかし、もうちょつと気の利いた声のかけ方できなかったのかと」
「つまり、この灯火あかりを消してはいけないと……」

「アンタわけわかんねっ！」

「とても良い匂いがする……。焦げないようにしてくれ」

「っアンタと話していると、私の頭の方がコゲそうだよ！」

カケルは携帯用鍋のスープをかき混ぜつつ、さらに喉を痛めさせながらも、大男ことノーリと少々噛みあわない会話をしていた。

今夜の食事は猪モグの肉と薬草を煮込んだスープ。

セキとモエギが狩ってきたのは若い猪モグで、セキが手際よく解体し、カケルが肉を発酵術でほどよく腐らせ、骨は出汁だしに。疲労回復、胃の働きを助け消化を良くする効能の薬草と、保存瓶に入れた香辛料スパイスで調理した。ノーリだけは呆けたようにテキパキした作業を眺めていた。

セキは夜食の出来栄を気にしつつ、カケルとノーリのやり取りを黙って見守っていた。二人の会話の押収の流れについていけなかったともいうかもしれない。しかし、このやり取りからノーリがなぜノエの森に独り脚を踏み入れたのか経緯が分かった。

大男の名はノーリ・ノイエンドルフ。ナイト爵を受勲したばかりで、今は各地を巡り見聞と腕を磨いている。その旅の途中で立ち寄ったドノバーグの町で、ノエ村からの救護要請を受けたが人手が割けないという自衛団に、手を貸して欲しいと頼まれた。

村長から伝書鳥がノーリの身の証になるのは間違いないし、態度

や話の内容から信頼してみることにし、協力をしてもらえるようにカケルとセキが提案してみると、即座に了解してくれたのでカケルとセキは自己紹介をし、経緯も話した。

危険なノエの森を進んだ理由は、カケルたちと同じ結論からだつた。自衛団から森について情報を得ていたので、かろうじて赤主と遭遇することは無かったものの、森歩きに慣れていなかったらしく森から出られなくなって彷徨^{さまよ}っていたという。

出会ったときの感動は生涯忘れないだろう。感動しているとは思えないような無表情でそう言い、ノーリはカケルの両手を力いっぱい握り包み込んだ。ボキボキと鳴った両手の痛みに悶絶したカケルはなんとか自己治療を果たした後、血が上った赤ら顔で槌を振り回しノーリを追い回した。

セットした金属板^{カイド}は脱水術のままだったので、目標^{ノーリ}から外れて当たった野営地周辺の羊歯や苔は、干からびた箇所が多く見受けられる。それからモエギとセキが宿め今に至る。

「えっと、頂きましょうか」

セキは宿めるように促す。カケルは仏頂面のまま自前の木のうつわにスープを盛り、鉄製のフォークをセキとノーリに差し出した。

「食器これだけだから先に食べたらず」

セキは戸惑いの表情で、カケルとスープを交互に見る。

「ですが」

「私はあんま動いてないし。どーぞ」

食わずに待っていたモエギに食べていいよと促す。戦力の面で役立たずの自分にいつも後ろめたさを感じていた。じゃあ頂きますと食前の祈りを捧げて食べたすセキに微笑む。

スープとカケルを代わる代わる見る遠慮がちなノーリに「ろくな食事取ってないんでしょ、腹の虫もうるさいし」と片手をパタパタと振ると空腹に根負けし、食べたした。

無言夢中に食事をする様子を眺めながら、カケルは得た情報を思い出しながらこれからの計画を確認しなおす。

ノエ村は賊に占領され、村人は外に出ることができない。賊の目当ては村の食料と財産に下働きの人手確保だと思われるが、商人があまり立ち寄らない、細々と自活するノエ村に目を点けた理由が他にありそうだ。

その賊はセキの話からある程度バランスの取れた構成をしている。頭は剣の腕が立つ。火属性の呪言魔術を使う魔術士もいる。見張りに弓使いを配置し、村の中剣を扱える者数人が巡回する。下っ端も短剣をぶら下げているという。総勢七人だと思つと教えてくれたセキを、あの状況でよく把握できたこと褒めた。まずは、賊の様子を伺い位置と動きを把握する。村人たちの状態も確認する。ノーリが加わった事で、状況によつては計画変更も考えている。

村人たちの扱いは、子供は村の教会に司祭と共に閉じ込められ、女たちは賊たちの世話をさせられている。動けない者や逆らう者は納屋に隔離され、痛めつけられて手足を繋つながれ放置される。

村人の男のほとんどは村のバリケードを作るための重労働に借り出されるが、セキを含めた森に入る獵人たち数人が集められたという。セキは村長と獵人仲間の手助けを得て、村から脱出したため目的は分からなかったが、賊の目当てに森の資源が含まれているのだろう。

「ふむ。森ねえ」

「本当に美味だった……。食べたことないくらいに」

思案に耽ふけっていたカケルはビツクリして仰け反った。いつの間にかノーリが目の前で空の器を差し出していた。相変わらず無表情のようだが、目を細め、心なしか微笑んでいるように見えた。

「ちよつと、私の分まだあるよね？」

「ノーリ様が良くお召し上がりになっていましたが、かろうじて確保しましたよ。それと、とても美味しかったです」

セキも今夜の食事に満足してくれたようで、少し照れた。空の器を受け取ってスープを継ぎ足し食事にする。ノーリがジッと見つめるので「何？」と睨む。

「……………その。森、が？」

「それは後でね」

「……………その。カケルの魔術についても」

「それも後でね」

「……………その。今更だが有り難う」

「それは皆にもね」

「……………その」

「食事させてくれない？」

餌付けされた小熊が大きくなったらあのように懐くのもかもしれないなあ。何日も森を彷徨い、髭は伸び、衣装は汚れて見る影もないが、相手は騎士なのだから不用意な発言は控えよう。セキは感想を呑み込み、火に乾いた羊歯をくべながら二人を見ていた。

モエギも食事を終えて野営地の周囲を見張りつつカケルを振り返るが、当初の頃と比べ、ノーリに警戒していない様子だった。

食べ終わってカケルは「あくまで予想の域を出ないけど」と前置きをして言う。

「村の狩人を集めていたって事から考えると、賊の本当の目的は森にあるんじゃないかと。んで、セキ。賊が狙うようなモノの事心当たりないの？ 例えば、滅多に取れない貴重なモノとか。そういうのって、外では価値あつたりするじゃん？」

セキはノエの森の知識をかき集め、しばらく思索しポツリと言った。

「……………赤主の巢、でしょうか。アレはちよくちよく移動しますから、

森になれた狩人でないと先んじての発見は難しいでしょう。ほら、この先にあった泉。アレは元赤主の巣だったのですよ。穴を掘って巣をかけるのが習性ですから。そういう穴がこの森には複数あります。それに、赤主となるまで成長できるのは一匹だけです。狩人を集める理由としては当てはまるかもしれませんがね。しかし……」

知識を掘り起こしながら述べるセキの顔色が変わった。焚き火の炎に照らされ血の気が引いていた。唇が震える。

「まさか……。赤主の卵を。今の赤主は得に凶暴性が増しているし、産卵時期に入っているとしたら。仲間を犠牲に！」

居ても立つても居られない様子で、弓と矢筒を手に立ち上がるセキをカケルは上着をつかんで止める。事情を聞いたノーリも立ちふさがる。

「気持ちとは分かるけどさ……」

セキは頂垂れガツクリと腰を下ろした。ならって腰を下ろしたノーリがカケルを見る。

「食事も終わった……。カケルの魔術について教えて欲しい」

カケルは後ろめたさを感じながらも、自分は攻撃魔術が使えないと前置きして、紋章魔術専門の魔術士見習いで、戦闘では役に立たないであろうことを謝る。するとノーリは顎鬚あごひげを摩りさす少し思索した後、フツと微笑んで首を振った。

「では例えば……。賊の気を散らし、潜入に役に立ちそうな魔術などの心当たりは？ ……剣を持たぬとも、薪を割る斧や、肉や野菜を切るナイフも時として敵を切り裂く道具にもなるものだ……」

カケルは驚いた表情でノーリを見返した。

攻撃魔術が使えない事に落胆される事を予想していた。逆にカケルの使うことが出来る魔術で？出来ること？を探してくれたみたいで……。

故郷のミカーゴ村では得にゲルバーハに、散々蔑あはれまれた。相対する言葉に、不覚に少し潤んだ目を伏せながら「使い方によっては無いこともない」と答えた。

出来ないことは出来ない。無いものねだりをしても仕方が無い。
出来る範囲で何とかする。精一杯。結果は後で付いてくるものだ。
そうだった。決めたんだった。
それに今は、ひとりじゃない。

「……村に入るなら、効果時間短いし音は防げないけど隠蔽術^{いんぺい}を直接肌に描紋すれば、敵から視認されなく出来る。安全地帯も作って救出できた村人を匿^{かくま}う事も可能かと。賊を捕らえておくなら穴掘り術もいける。刻紋ランプに刻んだ灯術の応用で、強い光を出す閃光術も描ける」

「十分だ。宜しく頼む。まずは村人の安全を最優先に、村に潜入し様子を伺ってこよう。可能ならば救出し安全地帯につれて来る。カケルは結界で待機しておいてくれ。詳しい情報を聞き出すために賊も何人かは連れてくる努力をしよう。セキは狩人として身軽に動け、内部にも詳しい。同行してもらおう」

うつて変わってハキハキと告げるノーリに、他二人は頷いた。
決行は夜明け前と決まり、カケルは薬茶を入れ、ノーリとセキに明日までの英気を養ってもらおうと夜の見張りをモエギと共に引き受けた。

「あ、そいえば。ねえコレ持ってって。セキに渡しておこうかな」
寝ようと横になったセキにポンとリュックから小袋を出して放り投げた。慌ててキャッチし、これは？ と訪ねるとニンマリとカケルは答えた。

「賊の気を散らす時に使って。それは愉快に踊ってくれるだろうか」

第6話：生活魔術士見習い、なんとかする（後書き）

誤字脱字指摘、アドバイス、感想お待ちしております

第7話：生活魔術士見習い、ピンチになる（前書き）

随分更新に間が……。

もし待っていて下さる方いたら、また来てくれたことに感謝！

第7話：生活魔術士見習い、ピンチになる

翌日。朝日を受けた空が藍の中に変わり、星の煌きが残る夜明け前。

カケルたちは、陰影が濃いノエの森から村の様子が伺える場所まで移動してきた。森を開拓して広げられた牧場の向こうの村は、薪などの木ぎれを組んで作られた大松明の炎が村のあちこちに等間隔で置かれているため、よく見えた。

「安全地帯の結界は牧場に描くことにするよ。無事に戻ってくるの、待つてるからね」

武装を整えたノーリとセキが頷き、カケルに教わった通りに、右の拳を額の前にかざして目を瞑り集中する。かざした手の甲に紋章がホワツと淡い光。肌に描紋した隠蔽術^{いんぺい}が発動する。空気に溶けるように二人の姿が掻き消えた。

残ったカケルは、草を踏みしめる微かな音が柵を越えて遠ざかったのを見守ってから、上着のポケットから暗視術の掛かった単眼鏡^{モノクル}を鼻に掛けた。水晶レンズ^{ハリ}に入れられた鉱物魔力染料の描紋が赤く淡く輝くと、暗闇が真昼のように視認できるようになった。これで灯り付けなくても地面に刻紋できる。身を低くし、忍び足で、ハンマーのもち手側の柄先で地面にガリガリと刻紋をし始めた。

ガシャーン、ガタン！

どうやら賊たちは村長宅に屯^{たむろ}っているらしい。濁^{だみ}声で怒鳴り、食

器が割れる音が聞こえた。続いて、娘らしき悲鳴。

身動きする音さえ消していれば、肩がぶつかりそうになるほど側をすれ違つても見張りの賊は気づかない。ノーリとセキは描紋隠蔽術をまとつたまま、村の中心にある村長宅の裏手までやって来ていた。

小窓の隙間から中を伺うと、テーブルに脚を乗せた賊の頭目らしき、ノーリより体格の大きい筋骨隆々とした猪首の縮れ顎鬚あごひげの男。その男の隣に立つやせ気味猫背の頬骨の目立つ黒衣ローブの男。抜き身の片手剣ソードを持ち、酒気と怒気の赤ら顔で、地面に倒れた老人を蹴りつける手下。くの字で倒れ付す老人。

「お爺様！」

そして、老人の側に跪ひざまずいた娘がいた。見目の良い容貌なので頭目の世話に駆り出されていたのだらう。悲痛の涙を浮かべて首を振る。深い赤褐色の長髪がフワリと揺れた。

「これ一つで充分だと？　まだ森の奥にやあ赤主の卵が残ってる。盗りつくすまで何度でも狩人を入れる。それとも……今すぐ首切られてえか！」

晒わらいながら、老人をもうひと蹴りする様子を一瞥いちへつし頭目はテーブル上の籠かごに手を伸ばして麻布をのけた。布の下には手のひら大の細く赤い筋が這う薄紅色の卵が一つあった。

「頭目」。これ一個で金貨ゴールド一枚なんすよね。巢にはまだ沢山あったから、ボロ儲けっしょ」

「卵一個持つてくるためにもう二人も……！　なのに！」

うつむいて呟いた娘の一言。頭目は卵を籠に戻すと、テーブルの上の豪勢な食事を一気に払い落とした。床に食事が飛び散り、金属の食器が耳障りな音たてた。娘の襟首をつかんでテーブルの上に放り投げ押さえつける。口元が歪んだ。

ローザ！ セキは声無き声で叫んだ。ビリビリと布を裂く音がした。次の瞬間には、正面玄関入り口へ駆け、見張りの手下を射た。急所を貫かれ仰け反り倒れていく賊を押しつけ、扉を開け突入してしまった。描紋した隠蔽術は急な動きをすると魔術効果が解ける。術が消える。

ノーリはフツと嘆息してセキの後に続く。こう派手に動いたからには、すぐ賊は集まってくるだろう。敵をなるべく減らしておくことにしよう。

キーン。鞘滑りの音。^{すべ}ニマム（ニメートル）の背丈に近い長さの両手長剣抜剣するや否や、駆けつけた賊の短刀が宙を舞ってもち手を切りつけられて倒れた。刹那の攻撃だった。ノーリが次のターゲットを沈めた後に、思い出したかのように短刀の男は悲鳴を上げてのた打ち回った。ノーリの紋章も消えて姿があらわになった。

開け放たれた扉をチラと見るが、踏み込まずに戸口前に陣取ったヒュッ。民家の屋根から飛んできた矢を切り、腰に帯びていた短刀を投げつけて弓使いを落とす。細めた目には^{えいり}怜悯な光。平坦に^{へいたん}呟く。

あと三人

「あゝ。腰しんど」

ノーリたちが村内部を偵察をしている頃。

刻紋し終えたカケルは、ハンマーを杖代わりして腰を折ったままトントンと拳で叩き出来栄を眺めた。モエギは身を低くしたまま、『クウ？』と小さく鳴いてカケルを見つめる。

「ん、完成。^{バイロ}発動！」

牧場の地面の刻紋がヒウンと微かな音を立てると、フツとカケルとモエギの姿が掻き消えた。外部からは知覚されない？安全地帯結界術^{ソーン}？だ。刻紋は淡い黄色に輝いている。

「ハッハッハ。良い仕事したー！これは防犯・収納系生活魔術^{シヨウモク}、さらに、存在するモノを空間を捻じ曲げ召集する呪召魔術^{シヨウモク}を組み合わせた、紋章に昇華集積した紋章結界術なのだよ！有事の際の避難場所を提供する事を目的として作り出された上級生活魔術で、結界の中で発動^{バイロ}させた人物が招かないと中に入れないし。フッフ、アハハハハ！」

民家二軒分の大きさもある広い円形の結界内部中心で、やや陶酔気味で大笑いする。ハミングするように『ウォーン』と遠吼えするモエギ。結界の効果は抜群で、これだけ大騒ぎしたのにも関わらず賊はやって来ない。

ひとしきり完成度を堪能してから、ノーリたちが帰ってくるのを待った。

が、飽きた。

手持ち無沙汰^{ぶさた}に見渡すと、牧場の隅に建つ家畜小屋に気づく。

「セキが言ってたなあ。行動けない者や逆らう者は納屋に……。確認してみるかな」

家畜小屋に行くに結界を出なければいけない。賊に見つからないように、ウエストポーチの隠蔽術^{カド}の金属板^{カド}を使って姿を消す。モエギは隠密行動に長けているので術はかけない。

一緒にソロソロと小屋に近づき背伸びして小窓から中を伺うと、体中に青あざと傷を負い、ボロボロの姿で柱に縛り付けられた中年の男が居た。他に人氣が無さそうなので、モエギに斥候^{せいく}を任せて中に入った。

やはり男だけだった。ホツと一息ついて近づくと男は腫れた目蓋まぶたを薄く開けて無言でカケルたちを見た。

「……ロープ切って治癒します。動かないで下さい」

低く囁ささいてモエギに警戒を任せ、短剣でロープを切り治癒力活性カ術で出血する傷口をふさいだ。

「楽になった、助かった。俺はファオスト。この村の鍛冶職人だ。アンタは？」

節くれだつてゴツゴツとした手で手首をさすりながらカケルに質問する。カケルが素直に自己紹介をして、経緯を手短に説明するとファオストは、「賊に逆らって痛めつけられこのザマだ」と肩をすくめてみせた。

「確認したい事が幾つかあります。賊の目的はノエの森の赤主ですよね？」

「……ああ。最初は物盗りかと思ったが。村の狩人を集めて森へ入って赤主の卵を持って上機嫌で帰ってきた。行きに連れて行った狩人三人が一人になっていた。巢にあった卵を全部もって帰れなかったから、残りの狩人に全部の卵を回収させると言っていた。俺は反対したが……」

ファオストは齒を噛み締め苦渋の表情をする。

「卵についてセキから聞きました。赤主の卵は森の主交代の時期に複数産み落とされ、その周期は百年に一回。その中の一つだけが主になるまで育つ。手のひら大で、細く赤い筋が這う薄紅色。割ると甘い芳香がし、中身は強力な魔力回復薬になるとか」

「ああ。主になる卵は特に強く香って、一番強力な魔力回復効果を持つ。主の卵以外は孵化しない。主の卵が孵化して新しい巢を作るため移動する頃を見計らって、孵化しなかった卵を腐る前に回収して売るのが。だが新鮮なほうが効能が高いし高値で売れる。だから賊たちは欲をかって早めに回収したかったんだろうな。ノエの森の狩人としての知恵は門外不出だし、狩人以外の村人は森を案内でき

ない」

村人を盾にとって言うこと聞かせてるんだろ。優先順位としては賊を何とかする事からか。ノーリとセキの無事を思った。

「ところで赤主を狩る方法とか知らない？ 倒す気はないけど」

「セキは村の狩人の中で一番の腕利きだ。セキから教えてもらっていないなら、無い。もしくは、倒すことが出来ないってことだろ」

ノエの森の恩恵を受けて生活する村人たちにとって、狩人を失うという事は村の存続に関わる痛手。赤主が森に居る事実から倒すこともよしとはしていない。カケルはそこまで考えて、理由も無いのに背筋が寒くなった。

嫌な感じ。

何か……もつと……。

しかし、その理由を考えても分からないので、目の前の事から片付けなければと気持ちを切り替える。

顔を上げるとファオストが小屋の中に立てかけられた熊手鍬くわを持つてふらつきながらも立ち上がった。

「動けるようになったからには黙ってらんねえな。アンタのお仲間の助太刀すつか。鍛冶仕事してつから、腕力には少しは自信がある」
ファオストは、ニツと笑い、力瘤を作つてポンと叩いてみせた。

「ちょ！ 大人しくしてよーよ！」

カケルは外に出ようとするファオストに結界で待つように促したが了承しない。意志は固いようだ。放っておけないので付いていくことにする。ファオストの手の甲に隠蔽術を描紋して発動の仕方、効果を教えた。

モエギと一緒に外の様子を窺うかががってから外に出た。ソロリソロリと全員で家々の建つ方へ向かう。

カケルは見張りの賊が立っているのを見て胸の鼓動がドクドクと

早くなった。緊張で体温が上がって暑い。

走ってくる足音が聞こえた。カケルたちは立ち止まった。一人の賊がやってきてカケルたちの近くに居る賊に「襲撃だ！」と告げた。見張りの賊はもう一人の賊と共に立ち去っていった。目の前の賊が居なくなつて緊張が少し解けた。

「俺たちも行くか」

ファオストが小さい声で言う。カケルは「ハイハイ」と不承不承返事をする。

ヒュオオオ……。

風が吹いた。

見上げると空は藍が増え、見える星が少なくなっていた。

カケルは火照った体に心地いいなと思いつつ、指に唾をつけて何とはなしに風向きを確認した。

「向かい風か。……ん？」

息を思いつきり吸い込んだ。賊が走って行った方から微かに甘い匂いがする。

「グルルル……」

モエギが低く唸った。カケルは手探りで見えないモエギを探して、落ち着けと抱きしめて、怪訝けげんな顔をして質問した。

「モエギ、なんで森のほう向いてんのさ……」

言ってから察してしまった。

「ヤバイヤバイヤバイ！」

カケルは叫ぶと走った。隠蔽術が解けて姿が見えたのも気にする余裕がない、といった切羽詰った表情だったのでファオストも首をかしげながらも続く。モエギも追いつく。

カケルは甘い匂いをたどって走りながら、ウエストポーチからカードをまとめてつかみ出した。ザラリと広げ「これじゃない、これじゃない」選んでは戻し、また取り出しては戻しを繰り返す。

焦っていたため必要なカードを取り出せない。しかも足元不注意で転がっていた空の酒瓶に躓く。カードをブチまけてしまふ。慌ててカードを拾い集めた。

「アレは……お仲間か？」

カケルは顔を上げる。ファオストは民家の影に隠れながら指差した。一番大きな家、村長宅前に倒れた二人の賊。一人は血を流し腕を押さえてのた打ち回り、一人はノドを矢で貫かれている。その側にノーリが冷めたように無表情でヒタと立っていた。かがり火の灯りで血に染まった長剣がギラリと光った。

ノーリはこちらにすぐ気づき長剣を構えた。見つめられてカケルはゾクリと震えた。本当に、あのノーリ？

「ノーリ……」

呆然と見返していると、ゴロン。屋根から音がして見上げた。ドサリ。

「ぎいやあああー！」

カケルの前に振ってきたのは短剣でノドを貫かれた賊だった。腰を抜かす。ガクガクと震えながらまたノーリを見ると、ノーリは構えを解いていた。昨日見た無表情だけど柔らかな雰囲気です。

「嫌あああ！」

村長宅から争う物音がして悲鳴が聞こえた。ノーリは中に入っていた。

「腰が抜けて立てない……すまんが、立たせてえ」

情けない声で言うファオストはカケルを片腕でヒョイと抱え、賊の体をまたいで戸口まで運んでくれた。カケルを降ろすを待つて

いろうと言ってノーリに続いた。

カケルは涙目で倒れた賊の死体の側で、目的のカードを探し当てると、槌を杖代わりに立ち上がって剣戟が聞こえる家の中に一步踏み出す。するとゴウと炎の弾が飛んできた。反射的にしゃがみこんで避ける。中から焦げ臭い匂いと共に、濃厚な甘い匂いが鼻をついた。

「卵ってすごい強い匂いがする。……あ、ちょっとまって。今まさに？風上にも置けない？状態！」

消臭術のカードをかざして集中する。多目に魔力を流すとカードがキーンと振動し強く輝く。一瞬にして甘い匂いと血臭と焦げ臭さが消える。

パキン。魔力を多く込めると効果が強くなるが過剰負荷がかかる。カードが砕けた。

「ガアア！」

モエギが飛び出した。その先からバキバキと木をなぎ倒す音があった。

振り返ると、民家をなぎ倒しなら巨大な赤い蜘蛛？赤主？がこちらに向かって来ていた。モエギが足一つに噛み付く。赤主が暴れる。

「どうした！」

ノーリが出てきたので、カケルはノーリの腕を引っ張って赤主を指差した。説明しなくともすべき事を察して、すぐノーリは赤主の下に走った。

「ちょ！ 賊は！」

カケルは走る背に問いかける。「倒した」と返ってきたので家の中に入ると、気を失ったセキを抱きかかえたローザが居た。老人を背負ったファオストが振り向く。筋骨隆々な頭目と、ローブを着た

魔術士、手下の賊らが倒れているひっくり返ったテーブルの側にシユウシユウと焦げた卵があった。消臭術の効果でこの場も臭いが消えている。

「もう臭いしないけど……遅かったか」

苦渋の表情で呟くと、セキが目を覚まして起き上がった。ローザがよかったと微笑んでセキにしがみついた。

「賊は……？」

「ノーリが倒したけど、主が来た。ノーリとモエギが食い止めてる」
セキとローザが息を呑んだ。

「セキ。赤主って倒す方法ある？」

「そんなことをした狩人は居ません……」

セキは零れ落ちた矢を拾って矢筒に入れ、矢を弓につがえながら外に飛び出して行った。

「ファオストさん。牧場の結界、入り口開けとくんで村の人たちを誘導して避難させて。避難し終えたら、この光球にさっきみたいに念じて空に投げて合図を。合わせて入り口閉じます。中にいる限り安全ですから。さあ早く」

淡々と説明し、上着のポケットから卵大の玉を渡す。ファオストは頷くと裏口から出て行った。

「最悪だ」

怖さで冷や汗と振るえが止まらない。槌にすがりつくようにしてかろうじて立っている。圧倒的な攻撃性、その姿。魔物が魔物たる所以を初めて目にして悟った。

しかし、戦っているモエギとノーリ。赤主を誰よりも知っているセキの飛び出していったときの凍った表情が忘れられない。

「これが、外の世界か……」

力の入らない膝を叱咤して歩くと、ローザが支えて付き添ってくれた。

外に出ると薄らとした朝日に照らされて、壊れた家々と戦う姿が見えた。

雨のように降り注ぐ蜘蛛の糸を交わしながら、セキは蜘蛛の目を射抜き、ノーリは赤主の上に振り落とされそうになりながらへばりついて剣を振るい、モエギは足を狙い何度も飛び掛っていた。

まだ無事のようなだが、魔物である赤主の底なしの体力と何時まで立ち向かえるか。

「セキ……、皆……」

ローザが涙を浮かべて戦う様子を見つめていた。森から出た赤主は退治しなければ村にいる人は食い殺されるだろう。選択権は一つしか無かった。

ウエストポーチからカードを取り出した。手が震えてなかなか交換できなかった。ローザが腕に手を添えて支えてくれたのでカードを装着することができた。「ありがと」と言うと静かに微笑み返してくれた。

牧場の上が輝いた。光球の合図だ。

さすが職人仕事早いなどと思いつつ、槌で牧場を指し「閉じよ^{フェアル}」と唱えた。これで結界は閉じたはず。

師匠、見守ってて。

スウと深呼吸して、体に活を入れて赤主へ。

「毎日を頑張って生きる人を助けられなくて何が生活魔術士だあああああ！」

朝の空気を裂くように叫んで槌を振りかぶる。

赤主の柱のように太い足がカケルを踏み潰^{つぶ}そうと真上に降ろされ

た。

「シッ！」

鋭い呼吸。カケルを潰そうとした足はノーリの長剣で切り飛ばされ宙を舞う。

「ガアアアアア！」

モエギが跳躍し赤主の複眼を爪で裂く。仰け反った赤主に追い討ちをかけるようにセキが放った矢が正確に目を貫いた。

「離れて！」

仲間のフロアのおかげで赤主の真下に入り込めたカケルは槌を振りかぶって地面を打ちつけた。赤主をすっぱり覆うように光が円形に広がり……。

ゴゾリ。

赤主の下が地面が消えた

第7話：生活魔術士見習い、ピンチになる（後書き）

今話は六千五百文字くらい行きました。八千文字を予想して書いてたんですが、意外と少なくなりました。説明や描写不足を心配します。

あと、ご指摘いただいて初めて「そういえば縦読みできたんだっけ」と気づきました。横書きのつもりで数字とか打ってた……。前書きとあとがきは横文字のつもりで書いてます

小説ももう7話目。小説用の創作用語多いのでそろそろまとめたものをアップしたほうがいいのかなあ？ 考え中です

今話も絶賛誤字脱字指摘、アドバイス、感想お待ちしております！

第8話：生活魔術士見習い、抗う（前書き）

今話には蜘蛛の描写が多めっぽくあります。苦手な方は回避してください！

第8話：生活魔術士見習い、抗う

赤主を囲む魔法の線が紋章魔術を描いた。

効果が発動し内側の地面が消えた。その地面の上に居た赤主とカケルは落ちる。即座に駆けつけたモエギ、ノーリ、セキが覗き込む。穴の底は真上から照らす星と朝の日光が届かず、闇に沈んで見えない。魔術で出来た巨大な穴だった。村人総出で掘り続けたとしても、数十日はかかりそうな深さのようだ。

「降りる」

ノーリは土穴の端に手をかけて底へ飛び降りようとするが、セキに止められる。怪訝な顔で見返すと、傍に来たモエギが穴の底を静かに見つめていた。ノーリとセキから注目され、モエギが「ガウツ」と小さく吠えた。

「深そうな穴です。落下の衝撃で赤主は少しビクキしていると思います。現状静かですから、さらに刺激を与えるのは良くないかと。様子をみましょう」

一方土穴の底では赤主がひっくり返っていた。真紅の毛に覆われた六対の付属肢を宙にうごめかせている。そのすぐ側でカケルが壁にへばりついて青い顔をしていた。起き上がる前に何とか現状脱出をしようとするが、片腕距離にいる赤主が気になり身動きが取れないでいる。

「この穴を脱出しないと……。ハッチ君たのんだよ」

落下しても手放さなかった槌をソロソロと構えて魔力を込めた。魔術が始動して淡く輝く。

ザザザザザザザザザ。

振り返ると赤主が激しく動いた。六つの肢を振り、揺れた反動で土壁を爪で引っ掛けて起き上がる。ザラザラと壁が崩れて大小石混じり土が押し寄せる。カケルは動いた肢の一つの爪に引っかかり、

叩き付けられて擦られた。

「がふっ！ かはっ……！」

土を食む。目が開けられない。青あざと擦り傷を作った。舞う土煙で咳きこんだ。カケルは槌を構えなおしてふらつきながら横壁を殴りつけた。術の発動と赤主の突進。間一髪でカケルが横穴に滑り込む。

ズズンザラザラザラ。

地上で穴底を窺っていたノーリたちにも衝撃音と土が流れる音が聞こえた。

「行く」

ノーリがしびれを切らして踏み込もうとすると、穴の底からテカテカとした白い糸が噴水のように吹き上がって降り注いだ。ノーリたちはとつさに飛び退く。落下した糸先は穴の回りに粘着した。

「這い上がって来る気のようにです。つく……やはり無理か！」

セキが腰に下げていた短剣で糸を切ろうとするが、刃が通らないのに粘着力があり、剥がし難い。

ギシャアアアアアギュグルルルル！ ドシンドンドンドンザザザザ……ザザザ…… フシユルルルルル。

再び吹き上がる白い糸。セキは短剣で、ノーリは剣の鞘で糸を引きはがす。黒炭色の光沢を放ち意匠が凝らされた装飾の鞘が土と糸で斑になる。しかし成果はでない。ピンと糸が引かれた。二人の視線が穴に集中する。

「赤主が穴から出てきたら、足止めしてくれた魔術士様の成果が無駄になります……。正面から戦い続ければ競り負けるのは目に見えている。どうすれば……」

セキは流れ落ちる汗を目元で拭いた。止まらない汗が目にしみる。目をこすりながらセキは穴を見続けた。

「そつだ……！ 一か八か」

セキは上着のポケットを探って巾着結びの小袋を出して矢じりに

挿して、流れるような動作で矢をつがえ穴の底に向け照準を定めた。
「来る」

糸に絡まった鞘から手を放して剣を構えなおしたノーリがセキの隣に並んだ。ギシリと糸が強く軋んで…… 赤主が糸を使い飛び昇った。赤主を視界に捉えた刹那、ノーリが矢を放った。八個の単眼が並ぶ中心で矢が刺さり、小袋が弾けた。黒・灰・黄土色の噴煙が舞う。穴の真上まで飛び出した赤主は、肢を振り回して再び穴の底へ落下していった。

「ウォンウォン！ キュウウン……」

ノーリたちが糸を引きはがしている間、穴の周囲をウロウロしていたモエギが唐突に鳴いた。モエギの鼻先に地面から手が飛び出した。地面がくぼみ、咳きこみながら泥まみれのカケルが現れた。モエギが頬をしきりに舐める。カケルは泥を吐き出しながら目をこすり、モエギにしがみついて土の中から抜け出た。カケルは腰のポーチから治癒力活性術のカードを槌の頭部に装着していたカードと交換した。装着していたカードが砕けて手からこぼれ落ちたのを見て、チと舌打ちをする。

「もうだめかと思っていました。赤主は穴底で愉快に踊っているようです。貴女のおかげでまたしばらく考える時間ができました。……あの粉は何です？」

セキが穴の底から視線を外さないままカケルに問う。

「廃屋を掃除した時の大量の埃ホコリと煤と、山荒あれイモの痒み成分。その濃厚なヤツ」

カケルはしゃがみこんだまま足の怪我を治癒しながら、口の端をあげた。

「芋……ですか」

セキが苦笑交じりで呟く。

「芋は偉大だ」

ノーリが頷く。

「いーもんみれたでしょ」

カケルは答えながら一旦治療を止めよろめきながら立ち上がった。半眼で土穴を見つめる。穴底からズドンズシンと赤主がもかく音が聞こえてくる。

「猶予は少ない。何か考えはあるか」

ノーリが剣を構えたままカケルの前に移動してきた。

「……………眠ってもらうか。穴に蓋をして下方に向けて保冷術を放つ。穴の中なら冷気が拡散しないからね。おあえつえ向きの氷室だよ。セキ、この方法でいけそう？」

「成功する可能性はあります。赤主の場合、冬は餌をため込んだ巣から出てきませんから。寒さに弱いと思います」

カケルは頷いて、槌に装着したカードを交換する。

「じゃあ……」

カケルの言葉が途切れる。ノーリが腰を引き寄せたからだ。カケルが立っていた場所を炎の帯が貫いた。モエギは赤主が砕いた瓦礫の間を駆け抜けて、隠れていた顎鬚あごひげの男へ飛びかかり食らいついた。「卵は渡さねえええ！ 魔術士、皆殺しにしるおお！」

モエギを引き放そうとしながら、怒声を向けた方向の瓦礫の物陰から黒衣ローブの男が出てきた。手を組み合わせ、韻を踏んで言葉を唱える。呪言じゅごん魔術士のような。カケルはノーリに向かって叫んだ。

「止めて！」

ノーリは迷いなく黒衣の男へ走った。男が真上に掲げた手の先の空中で炎の輪が生まれ、見る間に家一軒囲む範囲まで広がった。チリチリとした熱と、明々と照らされ破壊された家の影が炎の輪の外へ長く伸びた。ノーリの剣が首を貫くが、体勢を崩した男の肩に反れた。血しぶきと宙で爆ぜる炎の輪。すかさずノーリが回し蹴り飛ばす。横へ吹っ飛んだ男は瓦礫に強打し沈黙した。解けた炎が散り散りになり、村の外側に向かって降りそそいだ。

「がああああああ！」

顎鬚の男の喉笛に食らいついていたモエギが着地する。顎鬚の男は目をギラつかせ、離さなかった斧を叩き付けたがモエギは飛び、外れる。男はガクリと地に伏せて沈黙した。

ほう。カケルはノーリとモエギの短く長いような攻防に息をついた。

「魔術士様、早く！」

振り返るとセキが穴の底へ矢を放っていた。赤主がまた這い上がるようにしているようだ。カケルは両手で槌の柄を構え魔力を注いだ。キインとカードの震えて輝く。

「セキも離れて。過剰^{オーバーヒート}負荷させるから余波ですっごく寒いかもだし」カケルはセキが距離をとるのを確認してから、穴の表面部分の宙へ槌を打ち付けた。ビーンと金属音と破裂音。カードが砕けて、穴底に向けて白霧のような強烈な冷気が噴射した。穴の底が霧に沈む。続けて交換したカードで蓋のような円形の光が穴の表面を覆った。

「へぷしっ」

カケルは泥と霜混じりの前髪を掃って、落胆した様子で槌を眺めた。モエギが戻ってきて擦り寄った。撫でているとノーリとセキが歩いて来た。どちらも表情に安堵感がある。セキは穴の底を見てから耳をまし、一つ頷いた。赤主は保冷術の冷気で完全に動けなくなっていたようだ。セキは周囲を見えます、と告げて離れた。

「どうした」

ノーリが膝を折ってカケルの顔を覗き込んだ。カケルは渋い表情で地面に落ちたカードの欠片を摘まんだ。

「あああああもう、今日だけで何枚カード砕いたんだよ！カードの素材も刻紋の手間もかかりまくりだよ赤字だよ！しょうがないさ、分かってるさ。だけどこの損失をどこで補えっていうのさあ……泣けてきたよ。へへ泥が目染みるや……」

カケルが服の袖で目元を擦るしぐさを見ると、ノーリがカケルの

腕をそつと退けて懷から布を取り出し、顎を手で支えて上向かせた。
「擦ると腫れぐふ」

「魔術士様、こいつまだ生きていますようです」

セキがズリズリと黒衣の男を引きずってきた。カケルは拳を下して男を観察してから、ノーリを見た。

「なぜ殴る」

釈然としない表情で首をかしげるノーリを横目に、カケルは治癒^カ力活性術を取り出した。

「それは置いておいて。殺してしまったかと思ったけど手加減してたの？」

「なぜ殴る」

「頭つばい顎鬚男はモエギが容赦してなかったから、話を聞く要員が必要だったし……まあ注意してれば呪言魔術も使えないでしょう」

「なぜ殴る」

「そこに顎があるからじゃあ！」

ノーリは殴られた顎をさすりながら黙った。カケルは黒衣の男に治癒力活性術を施した。ノーリの剣を偶然避らけなければ絶命したであろう怪我だ。傷は浅くは無かった。

男の治療を済ませたカケルたちは、結界の外にいて飛び火を消していた鍛冶職人のファオストと物陰からカケルたちを見守っていたローザと合流し、安全地帯^{セーフティゾーン}結界術から村人たちを出した。安全地帯^{セーフティゾーン}結界術は雨風で線が消えない限り数日効果が残るが放置した。

「森も人も騒がしくなってきたね」

朝の淡い陽の光を正面から受け、眩しさに目を細める。時折身震いする冷たさの風が吹いてくるものの、沈黙していた家畜や草むら、森の生き物のざわめきも戻ってきた。

村人たちが崩壊していない建物をしばしの村人たちの生活の場として整えるために動き出す。赤主に村を半壊させられ、元の生活ま

で回復するのにはばらくかかるものの、賊たちに怯えることが無くなり、表情晴れやかに働いている。カケルたちは恩人として崩壊していない家のスペースを貸し切りで寝床として提供してもらった。教会の中の祭壇前で村人がシーツを広げて寝床を作ってくれたのは感謝したが、神様には今日だけお許しいただこう。お互い顔を見合わせて苦笑してしまった。そして泥のように眠った。

第8話：生活魔術士見習い、抗う（後書き）

お待たせしました（待ってくれてる方いるかわかりませんが……）。
やっとな続き更新です。半年ぶりの執筆なのでいろいろ不安ですが、
少しでも暇つぶしになって、楽しんでくださると嬉しいです。半年
ぶりの洗礼（誤字脱字、指摘、アドバイスなど）よろしく願います！
……少しだけ良いところもあれば書いてくれると励みにな
ります……（小声）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8562/>

生活魔術士見習いカケル！

2011年4月3日22時55分発行